バカヤロー！　小父さんたちは怒っているンだよ

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカヤロー！　小父さんたちは怒っているンだよ

【Ｎコード】
Ｎ１２２３Ｙ

【作者名】
一二三四

【あらすじ】
小父さん……、他所（よそ）の年配の男性を親しんで呼ぶ語。
だから、小父さんたちは憎くて怒っているわけじゃないんだ。
いいかい、小父さんはね、みんなに良い人になって欲しいから、日本の国をもう一度昔のように良くしたいから、敢えて厳しい意見を言うんだよ。
そこのところを勘違いしないでね。
ねっ、みんな。
両親を大切にする、お年寄りを大切にする、身体障害の方が

いたら進んで手助けをする、困っている人がいたら自分から手助けを申し出る、喧嘩をしない、暴力を振るわない、他人を妬まない、挨拶をする、どれも当たり前のことだよね。
当たり前のことを当たり前にする、そんな日本に戻そうよ。
そうすれば、住み易い国になるはずだよ。
そのためには、まず自分が変わらないとね。
一人ひとりが変われば、世界が変わる、簡単なことだよね。
それでは、気の弱い定年間際の窓際サラリーマン山田一郎の怒りの嘆き節、とくとお聴きください。
尚、同姓同名の方がいらっしゃいましたらごめんなさい。
けして悪気があって使ったわけではありません。

第一話　騒音の男

第一話　騒音の男

「うるせぇーッ！　音をもらすなぁーッ！　このヤローッ！」
ついに切れた。
山田一郎はラッシュアワーを避けるため毎朝五時半には家を出る。
ようやく見つけた平穏な時間帯、だったはずだ……。
乗っている乗客もほとんどが顔見知りになっている、とはいっても
別に会話を交わすわけではない。
ただ見慣れた顔ばかりだとなんとなく安心感がある。
いつもの顔がいつもの席にいないと、なにか気になるものだ。
山田はよほど空いていない限り、座ることはない。
況しては優先席に座ることなど、天地がひっくり返ってもない。
いつも進行方向から見て左側のドアの所に立つ。
いつかはこうなると思っていた。
山田は普段は小心な男だ。
サラリーマン生活三十五年、後三年で定年だ。
窓際族として、毎日無為に日々を過ごしている。
電車には時々異物が紛れ込む。
その日は学生風のアベックが乗っていた。
山田のいつもの場所に立ち、いちゃついている。
「チェッ！」
山田は仕方なしに、反対側のドアに立った。
どうも落ち着かない。
すると、山田の耳に嫌な音が流れ込んできた。
『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカ……』
癇に障る音だ。
男のしているヘッドホンからもれてくる。

その音は電車の騒音に時々かき消されるが、直ぐに山田の頭の芯に入り込んでくる。
「我慢、我慢、我慢」
山田はジッと耐える。
耳を手で塞いでみた。
『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカチャカ……』
それでも聞こえてくる。
「ああ、耳栓を持ってくれば良かった」
色々と気を紛らしてみるが、耳の奥に纏わりついてくる。
『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカチャカ……』
「向こうへ行け、バカヤローッ！」
山田は心の中で叫んでいた。
『シャカシャカシャカシャカ……ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ……』
只でさえささくれ立った心を逆撫でする音だ。
・・なんでこんな騒音を好むのだろう。こんな音を好む奴はクズだ・・
と、段々考え方が極端になってくる。
こんなのはただの騒音だ。
「くぅーう……、もう限界だ」
まさに逆鱗に触れた。

2

『バッシーン！』
山田はその男の左頬にビンタを喰らわしていた。
『なっ、なにするんだぁーッ！　こ、このヤローッ！』
周りの乗客が慌てて遠ざかった。
「ヤッカマシーッ！　みんなの迷惑を考えろーッ！」
と叫んでヘッドホンを毟り取り、床に叩きつけてグシャッと踏んづ

けた。
『な、な、ななな……』
山田の意外な行動にその男は言葉が出ない。
『だ、だからって、壊すことないじゃンか……。な、殴ることないじゃンか』
男は涙目で、周りの乗客に訴えるように言った。
「う、うるさい。公共の場で騒音を流す奴が悪い。学校でそんなことも教わってないのか」
『だ、だからって、こ、壊すことないじゃないか。ア、アルバイトして買ったのに……』
「そ、そんなこと知るか……」
感情のままに怒りをぶつけた山田も、段々冷静さを取り戻してきていた。
・・ちょっとやり過ぎたか……。さぁ～て、困ったな。まさか、弁償してやるとも言えないし……・・
『ぼ、ぼく、訴えます。殴られた上に、ウォークマンを壊されたンだから。どなたか、証人になってください』
『や、やばい。そうでたか……』
「お願いします。どなたか、証人になってください」
その男は哀願するが、誰もそれに応じようとはしない。
・・それはそうだろう。……普段傍若無人に振舞っている者が、涙目で訴えたとして誰が同情するものか・・
山田は少しホッとして、強気になってきた。すると、
『俺が証人になってやるよ。俺が証言してやる』
茶髪の男が名乗り出た。
『わ、私も証人になるわ』
ウォークマンをつけた若い女性も名乗り出た。
・・や、やばい。想定外の展開だ。これではどう考えても俺の不利だ・・
『おい、オヤジ、次の駅で降りろよ。警察に突き出してやるからな』

涙目の若者が味方を得た所為か、急に強気になってきた。
『弁償しろよ。それと慰謝料もだ』
「うっ、……」
『ふふふふ……、正義は勝つ』
「痛い、痛い」
勝ち誇った若者が山田の右手を捻りあげた。
『ゴッ！』
『い、いてぇーッ！　な、なにするンだ』
疲れたサラリーマン風の男が若者の頭に拳を叩きつけたのだ。
『おい、若いの……。黙って聞いてりゃ調子に乗るんじゃねぇよ』
『な、なんだとぉーッ！　やる気かッ！　まとめて面倒みてやるぞ』
と、拳を握り締めて身構えた若者が、茶髪に同意を求めた。
『バ～カ。なんで俺が、そこまで付き合わなくちゃいけねぇんだ』
茶髪が遠ざかって行った。
『そうよ、あんたバカじゃないの。勝手にやンなさいよ』
『えっ、あっ、そ、そんな……』
再び形勢逆転、若者は情けない顔を去って行く茶髪に向けた。
やがて電車は日暮里駅に滑り込んだ。
と、その若者はサッと降りて、山田の前から姿を消した。
・・ふ～う、よかった。つい調子に乗ってしまった・・
山田一郎は大きくため息をついた。

御仕舞

第二話　痴漢騒動

1

『なにをするンですかーッ！』
・・・……？　なんだ、なんかあったのか？・・・
山田一郎は降りる駅が近づいたので、車両の奥から出口へと移動した。
・・あれ、なんだこの女、俺を睨みつけているぞ・・
『助平ジジィーッ！』
「す、助平、ジジイ……、俺のことか」
周りの目が一斉に山田に向けられた。
「ま、まま、待てよ。い、いったい、俺がアンタになにをした」
『今、私のお尻を触ったじゃないですか』
「俺がぁ……、アンタのお尻を……。ふっ、ふざけんな、俺は降りるのにこっちへ移動しただけじゃないか」
『いいえ、確かに触りました』
「ちょ、ちょっと待ってくれよ。俺は鞄と新聞で両手が塞がっているんだよ」
山田は他の乗客にもわかるように、両手を翳した。
『でも、確かに触りました』
『いやねぇ～、朝から。だからオヤジと一緒に乗るのは嫌なのよ』
女の囁き声がした。
『おい、オヤジ。早く謝った方がいいぞ』
どっかから男の声が飛んだ。
『謝ってください。出ないと警察を呼びます』
「け、警察……。たまたま鞄が当たったぐらいで、警察」
この言葉で、山田は切れた。
「ふざけんな、バカ野郎ッ！　警察でもなんでも呼んでみろ！　不

細工な面ぁしやがって、な～にが、痴漢じゃ。鏡を見てみろ」
『ま～あ、ひどいことを。開き直るンですかっ！』
女の手が山田の手首を掴んだ。
山田がそれを振りほどくと、
『きゃーッ！　痛いッ！』
と叫んだ女が泣き出した。
・・やばい。これはやばい。このままでは痴漢にされてしまう・・
山田に男が迫ってくる。
『おい、女を泣かせるんじゃねぇよ』
こんな時に正義感を振りかざす奴が必ずいるものだ。
「俺はなにもしてないよ。ちょっと鞄は触れたかもしれないけど」
『ほら、皆さん聞きましたか』
「この狭さだよ。誰が降りようとしても鞄ぐらい触れるだろう。それに俺は、すみません、降りますって声をかけた」
『いいえ、聞いてません』
女はどうしても山田を犯人にしたいらしい。
『あくまでも惚けるなら警察へ行きましょう』
「わかった。それじゃあ、警察へ行って話をつけよう」
山田は段々冷静さを取り戻してきていた。
すると、
『そうだよ。その人は確かに降ります、すみませんって言ったよ』
「えっ！？　……」
どうやら山田の隣に立っていた学生風の若者らしい。

2

『確かにその人、言ったよ。ぼくははっきりと聞いた』
『わしも聞いた』
白髪の男が言った。
そして、

『だいたいあんた、少しは遠慮したらどうなの。この狭い中で新聞を広げて』
『そうだよ。他人に文句を言う前に、我が振り直せ、だ』
『まーあ、私のどこが悪いンですか。被害者は私ですよ』
と言って、女は周り睥睨した。
『おい女。いい加減にしろ。大騒ぎしやがって。この被害妄想のヒステリー女が……』
『な、なんですってッ！』
女が声の方を振り返った。
『……あッ！』
女はその声の主を見た途端、驚きの声をあげた。
『思い出したか』
周りの乗客は何事が起こったかと、怪訝な表情をしている。
『あんた早く降りた方がいいよ。こんなのに付き合うことはねぇよ』
『ああ、俺も思い出した。この女、この間も騒いでいた』
他の乗客が呟いた。
『こいつは常習犯だよ。ストレスを発散するために、いつもこんな言いがかりをつけているンだ』
『欲求不満の雌豚だ。だいたい女性専用の車両があるんだから、そっちに乗ればいいじゃないか』
『そうだよ。ふざけやがって、こんな女のひと言で男の人生が狂わされるンだから』
女はうつむいたまま無言・・・。
やがて列車がホームに滑り込むと、女は辺りの乗客を突き飛ばすようにして慌てて下りた。
『きゃーッ！　この女痴漢でぇーす』
誰かが女性の声色を使って悲鳴をあげた。
『きゃーッ！　私も触られた。誰か、あの女を捕まえてぇーッ！』
『あっははは……』
『がっ、ははは……』

『わぁーッ！』
笑い声とともに、あちらこちらから大きな歓声があがった。
・・ふーう、助かった。あのまま痴漢にされたら、俺の人生もここまでだった・・
まさに紙一重、人生どこに不幸が潜んでいるかわからない。
御仕舞

第三話　突き飛ばし男編

1

『ギャーッ！　』
という物凄い悲鳴に続いて、
『ドッカーン！　バッターン！』
という騒音、乗客の視線が一斉に車両の最後尾へと向いた。
『グワァーッ！　ギュー……』
もんどり打って床に叩き付けられた男はどうやら気を失ったようだ。
物音に驚いた車掌が慌てて出て来た。
『お客さん、お客さん、どうしました？　大丈夫ですか？』
男は口元から泡を吹いており、ピクリとも動かない。
車掌が乗客に怪訝な顔を向け、
『お客さん、しっかりしてください。もう直ぐ駅に着きますから』
もう一度気絶している男の耳元で囁いた。
『すみません、どなたか手を貸していただけませんか？』
車掌が訴えると、近くにいた若い男がおずおず進み出た。
『すみませんが、駅に連絡を入れますので、少し見ていてください』
『あっ、うっ……』
若者はどうしていいかわからずただ突っ立っている。
車掌は自分の部屋に駆け込んだ。
間もなく、電車は上野駅に滑り込んだ。
ケガ人が出たので暫く駅に停車するとの車内放送が流れた。
チッと舌打ちをして、数名の乗客が電車を降り、隣の京浜東北線ホームに並んだ。
タンカーを持って駆け寄って来る数名の駅員に、
『この人です。この人があの人を蹴飛ばしました。私、見ました』
山田の隣にいた女性が大声で訴えた。

『えっ、ほんとうですか……、お客さん、少しお話をお聞きしたいのですが、よろしいですね』
「……、えっ、あっ…」
有無を言わせない言い方だ。
山田は理由を話せば、自分の主張が通るだろうと考えていた。
・・まだ、六時半。少しぐらい時間を取られても遅刻することはないだろう。会社に電話するまでもないな・・
と安易に考えていた。
それで山田は、大人しくその駅員の後に従った。
上野駅の駅員控え室に通され、警察が来るので暫く待つようにと言われた。
・・えっ、なぜ？　警察……？・・
・・もしかして大ケガ、いや、もし死んでいたら、俺は殺人罪になるのか・・
という恐怖心が突然込み上げてきた。
・・これで俺のサラリーマン人生も終わりか……。後悔先に立たず、短気は損気、色々な想いが頭を駆け巡る。ああ、家族は悲しむだろうな・・
しかし、あの男に対する懺悔の気持ちも、ケガを心配する気持ちも湧いてこなかった。
その時になって、相手への思いやりというよりも、
・・ああ、なんであの車両に乗ったンだろう。なんであの男があそこにいなければいけないンだ。あいつさえいなければ、こんなことにはならなかったはずだ。あいつがあんなことをしなければ、俺が怒ることもなかった。そうだ、あいつが悪いンだ。俺は運が悪いだけだ・・
という、真に身勝手な考えが湧きあがっていた。

2

十分ほど待っただろうか、駅員に案内された警察官が二人部屋に入って来た。
『いや、お待たせしました。喧嘩にいたった状況について、少し聞かせてください』
警察官の聞き方はあくまでも礼儀正しかった。
と、若い警察官の無線の呼び出し音が轟いた。
はい、と応えてその警察官は部屋を出て行った。
『……なにっ、……死んだ。……』
と繰り返す驚きの声が、山田の耳にも届いた。
その後、声を潜めたのか話し声は途絶えた。
・・し、死んだ。……殺人、……刑務所、……憎しみ、懲戒免職・・
色々な想いが頭の中を駆け巡り、脂汗が滴る。
それまで好意的に事情聴取をしていた年配の警察官の表情が変わった。
息詰まるような無言の時が部屋に流れる。
やがてカチャリとドアのノブを捻る音がして、外に出た警察官が部屋に入って来た。
山田にはとても長い時が過ぎたような気がした。
中に残った警察官と山田の視線が入って来た警官の口元にそそがれた。
ゆっくりと口が開きなにごとかを語り出したが、山田の耳には意味のある言葉として捉えられなかった。
『あ・の・お・と・こ……』
繋がった言葉ではなく、音が一つずつ独立して聞こえてくる。
・・やはり、死んだのか……。俺は……、バカだった。いくら後悔しても、やってしまったことはもう戻らない・・
山田はそうなってしまった経緯を思い出しながら、後悔の念に浸っていた。

3

吊り革に掴まって新聞を読んでいた田中は、いきなり後ろから突き飛ばされた。
「うッ！　なっ、……」
振り返ると、ひとりの男が後ろのドアに向かって歩いて行く姿が目に入った。
・・またあいつか、いつも忌々しいやつだ・・
翌朝、田中は昨日と同じように新聞に読みふけっていた。
・・間もなく上野駅だ。来るぞ、あの男・・
リュックを背負い、野球帽を目深く被った男の姿を右目の隅でとらえた。
・・来る、来る、ドンドン迫って来る・・
早朝六時半の山手線車内は大して混んでもいないのに、吊革に掴まって立っている乗客を突き飛ばしながら歩いて来る。
山田はタイミングを計って、サッと身を引きその男との衝突を避けた。
避けたつもりだったが、ワンテンポ置いて身体に衝撃を感じた。
・・えっ、なぜ？　・・
と疑問に思い山田は振り返るが、後ろに立っている乗客はいない。
・・ということは、かなりスペースはあるはずだ。そうか、そうゆうことか……。それなら、こっちにも考えがある・・
『おい、あんた……。おい……』
「えっ？」
『なんだ、寝ているのかと思ったよ。それにしても、まあ、よかったな』
「……」
『あれ、あんたわかったかい？　相手は気がついたそうだ』
「……し、死んだンじゃ……」
『あ、えっ、ああ、さっきの話、聞こえたのか……。あれはまったくの別件だ』

『そうか、それでボーッとした顔をしていたのか』
「そうですか……、よかった……」
山田は安堵のため息をついた。
『でもよ、安心するのは早い。訴えるにせよ、示談にせよ、これからが大変なンだ。なにしろあんたは、一方的に加害者なンだからな』
『そうだよ。別にあんたの味方をするわけじゃねぇが、どんな無理難題が飛び出すか知れたモンじゃない。相当大変なことだけは覚悟しておいた方がいいよ』
若い方の警察官が気の毒そうな表情で言った。
「……」
『それだけ喧嘩は高くつくってことだ』
年配の警察官が呟いた。

御仕舞

第四話　化粧をする女編

1

・・おぅおぅ、また始めやがった・・
山田の前に座った若い女がバックから鏡を取り出し、しばらく自分の顔に見入ってから、おもむろに化粧を始めた。
・・しかし考えられねぇよな。これって恥ずかしいことだと思っていたけど、今の若者にはそうじゃねぇんだなぁ～・・
女は周りから奇異の視線をまったく気にする様子もない。
しかしこれほどバカにした話があろうか、周りにいる乗客はジャガイモか……。
・・半枯れとはいえ俺たちも男の端くれだ。ちっとは遠慮ってモンがあるだろう・・
『ふん、なによ、ジロジロと。私がなにをしようと勝手でしょ』
・・だいたい一番前の車両が女性専用なンだから、そっちへ乗れ、ってのよ・・
『女ばかりの車両なんて、私は嫌いよ。気取った女ばかりで、おもしろくもなんともありゃしない』
・・おぅおぅ、不細工な面しゃがって、いくら塗りたくったって無駄、無駄。ああ、もったいねぇ・・
『見ている、見ている。スケベオヤジ共が私を見ている。あ～あ、これが若い男だったらなぁ……』
・・このバカ女、スター気取りでやがる。バカだねぇ～・・
『あのオヤジ、いくつぐらいかしら……、ちょっと好みなのよね。お金があれば、付き合ってあげてもいいわよ』
・・おぅおぅ、チラチラと男の様子を窺っていやがる。どうせ、援助交際の相手でも物色しているンだろうが……。なんなら相手をしてやろうか。くくくく……・・

『あっ、あのオヤジ、いやらしい。なにを思い出し笑いしてンのよ。あら、好い男。学生みたいね。ちょっと誘惑してみようかしら……。チラッ（流し目）……』

・・なんだよ、この女。気持ち悪いな、席を替えよーっと・・

『あら、行っちゃった。隣のオヤジが臭かったのかしら……。いゃーね、中年のオヤジは臭くって。家の親父もそうそう、まったく男って中年になると粗大ゴミね。もっともお金を持っていれば別だけど……。あ～あ、お金持ちの若い男はいないものかしら……』

・・ほら、バカ女。色目を使うから学生が席を替わったよ。くくくく……、自分が嫌がられているって、わかってねぇだろうなぁ～・・

2

『四十代の半ばまでなら許せるわ。でも、そうね、年収は三千万円以上なきゃ嫌だわ。私のこの美貌と肉体の対価なンだから、当然よね。ふふふっ…』

・・おやおや、バカ女がうっとりしている。大方、金持ちの男を捕まえた夢でも見ているンだろう。バカは幸せだよなぁ～・・

『あのオヤジ、ちっとも私を見ないわね。オカマかしら……』

・・あ～あ、いつまでやっているンだよ。ああ、イライラする。無理、無理、土台が悪いンだから、いくら壁塗りしても無理。俺なら自殺するよ、まったく・・

『ほら、無理をしないで私を見なさいよ。いいのよ、遠慮しなくって』

・・ツンとスマして、気取っちゃって……。良い女のつもりなンだろうな、気の毒に・・

『私は女王様ね。ああ、男の視線が快感……、止められないわぁ～』

・・おやおや、鏡で自分の顔を見ながらウットリしちゃったよ・・

『今日こそ決着をつけなくっちゃ。絶対にあの新入社員をモノにしてやる、冷子なんかに負けないわ。ふん、見てらっしゃい、今日の

歓迎会の後、カラオケに行って……『

・・おっ、なんだ、急におっかない顔をしたぞ。便所へでも行きたくなったか・・

『今日は、数量限定の通信販売で買った勝負下着で決めてきたわ。数量限定なンだから、他の誰のよりも色っぽいはずよ。香水だってシャネルの五番よ。三万五千円も払ったンだから、絶対に落とさなくっちゃ。うふふふ……、冷子、見てらっしゃい』

・・今度は笑ってるよ。大丈夫かいな……、春先は多いってからなぁ・・・

電車は東武野田線の柏駅に滑り込んだ。

・・さぁ～て、今日も頑張るか。じゃあ、ねぇちゃん、また明日……・

『あ～あ、みんな乗換えか……。私は鎌ヶ谷まで、なんであんな所に会社があるのよ』

こうして、今朝も男たちと女の心理戦は終了した。

御仕舞

第五話　割り込む女

1

『は～い、すみませんねぇ…』
座席の僅かな隙間にデッカイ尻が割り込んできた。
・・おいおい、それは無理だろう。おい、ほらっ・・
山田一郎は弾き飛ばされるように席を立った。
『あら、すいませんねぇ～』
・・なーにが、すいませんねぇ、だよ、無理やりデカイ穴を割り込ませやがって。女もこうなるとどうしようもねぇな・・
『おい、アンタ』
「わ・た・し？」
という風に、山田は自分の鼻に人差し指を向けた。
『そうだ。アンタは立つことねぇよ。おい、ババァ、無理やり割り込みやがって。あっちへ行けよ』
『ババァ……、なんですってッ！』
・・ああ、言っちゃったよ。一番言っちゃいけないことを・・
山田はそそくさとその席を離れて、吊り革に掴まった。
『ああ、言ったとも。ババァにババァってゆって、なにが悪いッ！』
『キィィィーッ！　言ったわね、このスケベジジィーッ！』
『ななななな、なんだとぉー、スケベジジィーだぁ！』
『スケベで悪けりゃ、エロジジィーだ』
『こここここ、このぉ～』
『ふん、こここここ、って、テメェは鶏か』
『じゃかましぃーッ！　テメェこそ、ほんとに女か』
『なんだってぇー、こえ見えても立派な女よ。なんなら証拠を見せてやろうかぁ』
・・おうおぅ、すごいことになっているよ。よかった、あそこを離

れて……、触らぬ神に祟りなし。クワバラ、クワバラ・・
『バ、バカヤローッ！　そ、そんなものを見て、どうするんでぇ～』
『へへっ…、だらしない男だねぇ。おや、そういえばオマエさんは男かい。へへへっ…、なんなら証拠を見せてみな』
女がからかうように言った。
『あんだとぉ～、おお、見せないでかぁ。俺はどうなっても知らねぇぞぉ……。どうだ』
男は立ち上がると、その女の顔の前にむんずとつかみ出した。
隣の若い女性が、キャーっと叫んで席を離れた。
他の乗客たちも目を剥いている。
・・ああ、あいつ出しちゃったよ・・
『おや、まぁー、かわいいオチンチンだこと。オマエさん、よく恥ずかしくなく、そんな粗末なモノを人前に晒すねぇ』
と言って、その女は男のモノを指でピンと弾いた。
『あっ、うっ……、てぇなぁ～、このアマーッ！』
『けけけっ…、アタシは尼じゃねぇよぉ』
見知らぬ振りをしていた乗客から苦笑がもれる。

2

……と、
『誰だ、今笑った奴は誰だッ！』
男の視線が一人の男を捕らえた。
『オマエだな。今笑ったのはお前だな。否、絶対にオマエだ』
男は、女の元から逃れるように、そちらに詰め寄って行く。
『い、いえ、ぼ、ぼくは、なにも……』
『否、確かにオマエだ』
どうやら逃げ出す切欠ができたようだ。
可哀想なのはその言いがかりをつけられた男の方だ。
なにもその男だけが笑ったわけではない。

一番弱そうな男に目をつけたのだ。
『うっ、や、止めてください』
襟首を掴まれた気の弱そうな男が後ずさりをして、山田にぶつかった。
・・や、やばい……・・
『おっ、アンタ、さっきの……、元はと言えばオメェさんが原因だぁ。やい、こらッ！』
「な、ななな、なんですか？」
『なんですか、じゃねぇや。オメェがしっかりしてりゃ、俺はこんな恥をかかなくてすんだものを……』
男は気の弱そうな男の襟首から手を離すと、今度は山田に掴みかかってきた。
「そ、そんな、無体な」
と言って、山田がサッと体をかわすと、男はタッタッタとタタラを踏んで座っている女性に抱きつく格好になった。
『キャーッ！　ビターン！』
女性の叫び声と同時に、男の頬に平手が飛んだ。
『イテェーッ！　な、なにしやがんでぇ、このアマーッ！』
男は血相を変えて、そのビンタをくれた女性に掴みかかろうとする。
山田は咄嗟にその男の足を払っていたが、そのことには誰も気がつかなかった。
『ドッターン！』
男はもんどり打って床にひっくり返った。
山田が顔を覗き込むと、息をしているので安心した。
どうやら気絶したようだ。
『けつけけけけ……、だらしない男だねぇ～』
山田が視線を向けると、割り込み女は軽くウインクを返した。
・・見抜かれたかな・・
御仕舞

第六話　訳もなく笑う男と女

1

「アハハハ……」
「ウフフフ……」
山田は顔を上げて二人の男女を見上げた。
午後六時十分発の常磐線、前から二両目に乗ることにしている。
と言っても、別に理由はない。
強いて言えば少し乗客が少なめか……。
「今日は、どうも、アハハハッ…」
「ウフフフ……、いいえ、こっちこそ、ウフフフッ…」
「久しぶりに、アハハハ……、会えて、アハハハ……、楽しかった。アハハハッ…」
「そういえば、さあ……、ウフフフッ…」
「アハハハ……、なぁ～に？　アハハハッ…」
「なぁ～に、って、だってさぁ～、ウフフフッ…」
・・ええいッ！　イライラするな。なにがそんなに可笑しいンだ。
なにが言いたいンだ。話すなら話せ。笑うなら、笑えッ！　・・
「ウフフフッ…、うんでさぁ……」
・・だから、なんナンだよ？　・・
山田一郎は定年間際のサラリーマンだが、疲れていても余程のことがない限り電車で座ることはない。
それが彼なりの矜持だった。
しかし最近は、他人と争って席を奪ったり、或いは空いているからといって優先席にまで座ることはしないが、帰宅時に空席があれば座ることが多くなっている。
やはり、これも年齢の所為か……。
「アッハハハ……、そうそう、スズキ、スズキは知っているよね？

アハハハッ…」
「ウフフフ……、あのスズキ君でしょう。フフフフッ…」
「うん、アハハハッ…、そう、あのスズキ。アハハハ……」
・・どこのスズキだよ。スズキがどうしたってンだ・・
「スズキ君がどうしたの？　ウフフフッ…」
「あいつがさぁ～。アッハハハ……、ああ、可笑しい。ハハハッ…」
・・ええい、イライラする。スズキがどうしたンだよ？　・・
山田は想わず声を出しそうになった。
或いは、「え」ぐらいは、出していたかもしれない。
その証拠に二人が同時に山田の方を振り返った。
二人は山田が座っている座席の対角線上に位置するドアに並んで立っている。
・・あっ、ヤバイ・・
山田は目を伏せた。
争いを好まないと言うよりも、近づかない、或いは避けて通るのが山田流の処世術だ。

2

しばらくの沈黙……。そして再び、
「スズキがさあ……、アッハハハッ…」
「うん、フフフフ……、スズキ君が、またあれでしょう。ウフフフッ…」
「アハハハ……、そう、あれよ、あれ」
・・ええい、イライラする。あれってなんだよ？　・・
「また、あれなの……、困ったものねぇ。フフフッ…」
「そう、あいつ、バッカじゃねぇかと思うわけよ。オレテキにはさぁ～。アッハハハ……」
・・オレテキには？　なんだ、それ？　そんな日本語あるかよ・・
「ウフフフッ…、ワタシテキにもそう思うわぁ～」

・・おいおい、こんどはワタシテキときたか。ああ、世も末、もう日本語も終わりだな。美しい日本語よ、どこへ行った？　そんで、スズキはどうしたンだよ？　ええい、じれったいなぁ～・・

「うん、鈴木君が礼によって、また買ったらしいよ。アッハハハ……」

「ウッフフフッ…、ほんとうにバカね、いつもながら。ウフフフ……」

「だろう、だろう。君もそう思うだろう」

・・思わねぇよ。だからスズキがなにを買ったンだよ？　・・

「ウフフフ……、ほんとうに懲りない人なのね。でも、スズキ君って可愛い……」

「えっ、君はああゆうのが趣味なの」

急に男の方がマジになった。

「あ、えっ、ウッフフフ……。まっさかぁー、冗談も休み休み言ってよね」

「だろう、だろう。アッハハハ……、まっさかぁ～、ねえ」

・・どうやら男はこの女に惚れているようだ。しかし、まだ深い関係ではないな。女、……気をつけろよ。まあ、どうでもいいことだが……・・

と山田は勝手に推理した。

「ウフフフ……、この前は万能包丁と安眠枕。その前がステンレス製のお鍋セットでしょう。それに高い木の枝を下ろすノコギリと脚立……。ウフフフッ…」

「よく覚えているね？」

男の顔が再びマジになった。

二人が付き合っているのではないかと疑っているようだ。

「ウフフフ……、でも彼はアパート住まいでしょう。そんなノコギリとか買って、なんに使うつもりなのかしら……？」

「死体でも切断するンじゃないの。アッハハハッ…」

「……」

女が白けた。
・・だから、おまえさんはもてないの。そんな冗談、笑えますか。
バァ～カ……・・
山田はなんとなく溜飲が下がった気がした。
女は山田好みの顔だった。

3

鈍い男も気が付いたようで、話題を変えてきた。
「あのさぁ～、この間、同窓会があって」
「えっ、私、知らない」
女もこの男に惚れている、と山田は推測した。
「あ、いや、ほら、僕が転校して来る前にいた小学校だよ。アッハハハ……」
「なぁ～だ、そうなのぉ～。ウッフフフ……、で、楽しかった？」
「あっ、うん、マアマアってとこかな。アッハハハ……」
男は楽しかったと言いかけて、慌ててマアマア、と言い換えた。
「初恋、の人、いた？」
「あえっ、は、初恋……、そんなのいないよ。アハハハ……」
「ほんとう？」
女が疑いの目を向ける。
「ほ、ほんとうだよ。俺、奥手の方だったから……。へへッ…」
・・おいおい、駆け引きはもういいから、好きなら好きって煎っちゃえよ・・
「あのさぁ～、ヤマダ君、好きな女、っているの？」
・・ヤマダ、俺のことか？　うん、もちろんいるよ。そんなわけ、ねぇか・・
「えっ、え、え、ええ……、アッハハハ……、好きな女？　……うん、いる」
「えっ、いるの……」

「あっ、つまり、だから。エッヘヘヘヘ……」
・・ええい、鈍い女じゃ。おまえのことだよ、おまえの……・・
「……ヒロミ」
・・おっ、ついに言ったか。それでこそ男じゃ。愛の告白、俺が証人じゃ・・
山田は思わずニヤリと笑っていた。と、
「ヒロミのことが好きなの？」
「うん、結婚前提で付き合っているンだ」
男があっけらかんと言い切った。
・・なにッ！　この女じゃねぇのか……・・
人生経験の豊富な流石の山田も読み違えていた。
「そうナンだ……」
「アッハハハ……、結婚式に招待するから絶対来てね。会費制だけど。アッハハハ……」
「……」
・・バァ～カ。糞して寝ろ・・
山田は心で耳を塞いでいた。

御仕舞

第七話　足を組む男

1

「ギャーッ！　なにすんだ、この糞オヤジッ！」
『ジャカマシー！　デカイ態度で座ってンじゃねぇー！』
山田一郎は座席に踏ん反り返り、足を投げ出して座っている男の足の甲を思いっ切り踏んづけていた。
「なんだとこのヤロー！　わざと踏んづけやがったなぁー！」
『そうだ、文句あっか。とっとと、小ぎたねぇ足、引っ込めろ！バカヤローが』
と啖呵のひとつも切りたいところだったが、山田はジッと我慢していた。
・・寝ていて気がつかないンだな。次の上野駅なら人が沢山乗って来る。そうなれば足を引っ込めるだろう・・
と期待を持って我慢していた。
乗り込んで来る乗客に押されて、山田の新品のズボンが男のスニーカーに触れた。
青山で買ったばかりの春物の背広だった。
グリグリとズボンがスニーカーに当たっても、男は足を引っ込めず寝た振りをしている。
山田の新品のズボンが埃で白く汚れた。
『す、すいません。足を、足を引っ込めてくれませんか』
「……」
男の反応はない。
相変わらず目を瞑ったままだ。
・・これだけ当たっているのだ。気がつかないはずはない・・
『すみません！』
山田はもう一度、今度は少し声を荒げて言った。

すると男がジロッと一瞥をくれ、再び目を閉じた。
・・こ、このやろう……、舐めやがって……。よーし、そっちがその気なら、オジサンを怒らしたらどれだけ怖いか教えてやろう・・・・普段の山田は争い事には近づかない平和主義者、と言えば聞こえはいいが、な～に、ただの小心者だ・・
そんな男が一旦切れるとヤバイ。

2

「イテェー！　な、なにすんだ、この糞ジジイーッ！」
その男が足を抱えて立ち上がった。
『なんだとぉー、黙って聞いてりゃ、糞オヤジだ、糞ジジイだと。こ、この糞ガキャー！』
「な、なんだと、テメェは黙って聞いてねぇじゃねぇか」
周りの乗客から、クスクスクスと笑い声が漏れた。
「なっ、なにがおかしい！　テ、テメェ、笑ったな」
男が周りに当り散らす。
立ち上がって詰め寄ろうとすると、目標にされた男の顔が引き攣った。
『やい、こら。糞ガキ、相手はこっちだろう』
・・ああ、余計なことを言ってしまった。ま、拙いな……・・
「なにぃー」
『あ、うっ、ゲホッゲホッゲホッ……、グ、グルジィー……』
男が山田の胸倉を右手で掴んで、左手の拳を振り上げた。
「こ、このヤロー」
まさに拳が振り下ろされようとした瞬間、
「止めたまえッ！　警察だ」
「あ、へっ…」
男は、そのひと言で振り上げた拳のやり場に困り、拳を見詰めている。

「止めなさい。現行犯で逮捕するよ」
すると、山田の周りにいた四、五人の男がサッと散った。
「や、山崎……」
後ろの方から咎めるように名前が呼ばれた。
「チェッ！　もう少しで逮捕できたのに……」
「ったく、バカが……。三ヶ月の張り込みがパーじゃねぇか」
山田はその場からコソコソと離れ、人込みに紛れ込んだ。すると、
「ふ～う、……」
と、隣の男が溜息を吐いので、そちらに目を転じると、さっき山田が足を踏んづけてやった男の顔がそこにあった。
山田は男に気づかれないように、その場を離れた。
―　君子危うきに近寄らず。三十六計逃げるに如かず。
・・やべぇ…・・
と呟いて、山田は次の駅で降りた。
それは長いサラリーマン人生を通じて得た知恵だった。

御仕舞

第八話　躾の出来ない母親（オヤ～？）

1

『イテッ…』
「……」
・・あれ、聞こえなかったのかな……？・・
と、山田一郎は首を捻り、
『あっ、イタイッ！』
今度はさっきより大きな声をあげた。……が、
「……」
再び無視。
・・ああ、やっぱり。この女、わかっていながら無視しているンだ。テメェのガキの面倒ぐらいしっかりみろよ。ガキの靴が俺のズボンに触れているだろうがッ！・・
と、怒鳴りたいのを山田は必死に堪えて、
『お嬢ちゃん、ダメですよ。ほら、お嬢ちゃんの靴が小父さんのズボンに触れているでしょう……』
ズボンを指差しながら、優しく諭すように言った。
しかも笑顔までサービスして……、ああ、それなのに……、
「？」
と怪訝な表情で山田の指先を見詰め、母親の顔を覗き込む。そして、
「……」
親子揃って無視。
・・なんだ、なんだ、なんナンだよ、こいつらは……。親子揃って無視かよ・・
『あのー、すみません。お宅のお子さんの靴、なんとかしていただけませんか？』
山田は堪りかねて母親に直接苦情を言った。

争いを好まない、否、争いは避けて通る山田にしては珍しいことだ。
・・シマッタ……・・
これから起こる、であろう我が身の不幸に想いを馳せ、山田は猛烈に後悔を感じていた。
できるものなら逃げ出したい。
・・しかし待て、ここで弱みを見せるな・・
山田は自らを叱咤激励する。
・・なにせ相手は百戦錬磨の若きアバズレと、そのアバズレに鍛え抜かれた小生意気な娘だ。一旦弱みを見せたら負けだ・・
と言い聞かせても、心臓がドックン、ドックンと早鐘を打ち、口から飛び出しそうだ。
山田は歌舞伎役者の隈取りのような厚化粧顔を見ながら、その耳まで裂けた恐ろしい口から発せられる言葉をひたすら待った。
ほんの数秒のはずが、それはとてつもなく長い時間に感じられていた。
……と、
「麗ちゃん、お止めなさい。隣の怖いオジサンに叱られますよ」
その女は山田に視線を合わせることもなく、正面を見据えたまま機械的に言う。
するとガキ、否、レイお嬢様が山田に軽蔑の視線を投げかけ、
「……」
三度無視、同じ姿勢で足をバタバタさせている。
母親も一度注意しただけで、もう役目は済んだとばかり、それ以上は言及しない。
・・むっ、むむむむ……、こ、このヤロー、下手に出れば付け上がりやがって・・
山田の怒りは頂点に達し、お嬢様、否、ガキの足を左手で強く払った。
すると、そのガキは一瞬驚きの表情を山田に向け、次に母親の顔に目を移すと、

「ウンギャーッ！　ギャーッ！　イダーイッ！　ギャワワワーッ！」
と叫び泣き出した。

2

「あへっ！？」
「あ、あなた、わ、私の娘に、なにをするンですかぁーッ！」
隈取りの厚化粧女が、目を吊り上げコメカミに青筋を立てて怒鳴った。
「あっ、えっ、わ、私は、ただ……」
正に鬼の形相、山田の心が縮みあがる。
「ただ、なんナンですかッ！」
女が嵩にかかって攻める。
・・シマッタ……、これで俺のサラリーマン人生も終わりだ・・
山田一郎は定年間際の窓際族、社内に彼を庇ってくれる者は誰もいない。
“株式会社〇〇の窓際社員山田一郎、電車内で女の子に暴力を振るう。変質者か……”
翌日の朝刊の見出しが目に浮かび、会社の同僚や家族の罵声が聞こえてくる。
「あ、あなた、今、私の大切な麗ちゃんに、ぼ、暴力を振いましたね」
「ぼ、暴力、だなんて……、わ、私はただ……」
「いいえ、確かに、私はこの目で見ました」
「わ、私はただ、この足が、こうだから……、こうしただけで……」
山田はズボンの汚れを指差し、軽く足を払う真似をした。
「ほら、また暴力。みなさん、この方が私の可愛い娘に二度も暴力を振いました。どなたか、警察を呼んでください」
周りの乗客の目が山田に集中する。

「け、警察、だなんて……」
・・ああ、なにもかも終わった・・
退職金と書かれた白い封筒に羽が生え、東の空に飛んで行く。
「さ、警察に行きましょう」
山田の弱気を見越した厚化粧女が、嵩にかかって責め立てる。
娘も一緒に、正義は我にありとばかりに睨みつけている。
「娘に土下座しなさい。床に手をついて、娘に謝りなさい。そうすれば許してあげます。ねえ、麗ちゃん？」
「うん」
偉そうに娘が頷く。
山田絶体絶命のピンチ……。
・・な、なんで俺は、いつもこんな目に遭うンだ。俺がいったいなにをした。俺はただ、当然のこととして、降りかかった火の粉を振り払っただけなのに……、そうだ、なんで俺がこんな連中に謝らなければならないンだ。悪いのはこいつらじゃないか。警察でもどこへでも行ってやろうじゃないか・・
山田は開き直った。
「警察だなんて、大げさ過ぎます。私はただ、貴方の娘さんの靴が私のズボンに触れていたので、注意しただけです。見てください、まだ汚れがついています」
再びズボンの汚れを指差し訴えた。
「私、知らない。麗ちゃん、そんなことしないもん」
「ほら、娘は知らないと言ってます。どうせ、最初から汚れていたンでしょう」
「な、なんだ。じゃあ、俺が嘘を言っていると言うのか。なんで、俺がそんな嘘をつかなきゃいけないンだ」
「さあ、それはご自身の胸にお聞きなさい」
厚化粧女は皮肉な笑みを方頬に浮かべ、口を曲げて言った。
そう、彼の国の総理大臣のような……。
「さあ、謝るンですか、謝らないンですか。謝らないのなら警察へ

行きましょう」
厚化粧が迫ってくる。と、
「いい加減にしろ、バカ親子。うるさくって、眠れねぇじゃねぇか」
前に座って目を瞑っていた職人風の男が、堪り兼ねたように口を開いた。
助け舟……、山田は少しホッとした。
「バ、バカ親子、ですってぇーッ！　なんナンですかあなたは、この男の仲間ですか？」
「仲間ぁ～……、そんなモンじゃねぇよ。俺にはどうでもいいことだが、なにせあんた、ギャァギャァとうるさくって、寝てらんねぇ。いい加減にしろよ、ったく……」
男がジロリと厚化粧女に一瞥をくれると、
「……」
その目が恐ろしかったのか、女は反論をしなかった。
「俺はさっきから見ていたけど、確かにあんたの娘さんの靴が、その男のズボンに触れていたよ。俺はよく我慢をしていると、感心して見ていた。俺なら、娘っ子とあんたの頭を引っ叩いているぜ。クククク……」
「……」
その男の言葉を厚化粧女と娘は、二人とも目を伏せて聞いている。
「どうだ、もうなしにしたら？　あんたはどうだ？」
山田に向かって、男が言葉を投げかけた。
「は、はい。私は、もう……」
「ほい、そうかそうか。で、あんなの方はどうナンだ？　ああ、聞こえねぇよ」
「……はい」
「おう、そうかそうか、わかってくれたか。じゃあ、もう騒がねぇでくれよ。俺は眠いンだからよぉ～。なあ、お襄ちゃんも周りの迷惑にならねぇように、ちゃんと前を向いて座らなきゃダメだよ。いいね、わかったね」

厚化粧女の娘がコクリと頷いた。
「ククククク……、よく見りゃ、二人とも、可愛いらしい顔をしているじゃねぇか。なあ、目を吊り上げていちゃ損だよ。ククククク……」
厚化粧女とその娘が微笑みを浮かべた。
・・助かった。……なるほど、確かに冷静に見ると、二人とも可愛い顔をしている。それにしてもこの男、身形は良くないが大物だ・・
山田は男に軽く会釈した。と、
「おい、おっさん。一杯奢れよ。ククククク……」

御仕舞

第九話　バカ犬とバカ飼い主

1

『あッ！』

散歩中の山田一郎と愛犬の直太郎に二匹の大きな犬が迫って来る。

狩猟犬、ポインターだ。

山田の背筋に冷たい汗が伝った。

獲物を追い詰めるように、二匹の猟犬はジリッジリッと迫って来る。

直太郎は逃げるどころか、低く身構え牙を剥いている。

身体は小さいが、いざとなると中々の根性を見せる。

しかし多勢に無勢、身体も直太郎の二倍近くある。

そんな二匹が迫って来る。

なにか得物があればいいのだが、田園の中の畦道、辺りを見回してもなにもない。

山田は咄嗟に少し大き目の石ころを数個拾った。

飛び掛ってきたら叩きつけるつもりだ。

山田は二匹の犬から視線を外さず、屈み込んで首輪の繋ぎに手を掛けた。

『直ッ！　引き綱を解くぞ。敵わなかったら逃げろ』

「こらーッ！　おまえらなに遣っているんだぁ。行けッ！」

二匹の犬はビクッと振り返ると、頭を垂れ直太郎から視線を外した。

手に引き綱を持っているところを見ると飼い主らしい。

・・まったく、なにを遣っているンだか。こんなと所で放すのはルール違反だろう・・

「おう、悪いな。動かないでくれよ」

・・なにを偉そうに、とっとと失せろ・・

「ほれ、行くぞ」

男が二匹に命ずると、山田たちから離れて行く。

丁字路を折れてアホ面した二匹の犬と偉そうな猿面男が姿を消した。
『ふ～う、行ったか。な～あ、直太郎。まったく頭にくるなぁ……。しかしおまえ、結構遣るねぇ～』
と声をかけると、直太郎は山田の顔を見上げた。
柴犬の純潔種だ、小型犬だが気は強い。
いつだかも図体のデカイ雑種を一唸りで撃退したことがある。
『さぁ～て、行こうか。散歩の邪魔をされたけど、まさか戻っては来ないだろう』
直太郎はなにごともなかったように、あっちでクンクン、オシッコをシー、こっちでクンクン、オシッコをシーといつものペースで歩き出した。と、
〔ウー、ウウウ……〕
前方を睨み低く唸る。

2

〔グルグルグル……〕
と唸り声が聞こえ、やがてさっきのアホ面二匹が姿を現した。
『糞ッ、また戻ってきやがった……』
流石の大人しい山田も怒りが込み上げてくる。
一度は捨てた小石をもう一度拾い握り締めた。
「ガウーッ！」
黒毛アホ面犬が直太郎に突っかかって来る。
牙を剥いて応戦する直太郎、一歩手前で黒毛アホ面犬が止まった。
二匹は低く身構え、牙を剥き合いガチッと相対する。
しばらく睨みあう。
と、その均衡を破るように、もう一匹の薄茶マヌケ面犬が脇から直太郎に襲いかかろうとした。
山田は薄茶マヌケ面犬目掛けて、持っていた小石を叩き付けた。
〔キャン、キャン、キャン、グルルル……〕

ドスッと鈍い音を発して、肩の辺りに小石が当った。
すると薄茶マヌケ面犬が山田を睨む。
山田は恐怖から持っている小石を薄茶と黒毛に次々に投げつけた。
そして、犬の目を睨みながら手探りで小石を拾う。
『石を投げるなッ！』
と怒鳴りながら偉そうな猿面男が戻って来た。
「なにを言ってやがる。動くな、って言ったからジッとしていたのに、また戻ってきやがって。躾もできないような犬を放すんじゃねぇ。早くなんとかしろッ！　とっとと繋げ」
バカヤローという言葉は飲み込んで、山田は怒鳴りつけていた。
・・ヤバイ・・
怒鳴ってしまって後悔したが、一度口から出た言葉はもう取り返しがつかない。
争い事を避けて通るのがいつもの山田だ。
“犬の飼い主同士が諍い、一人は死亡、もう一人は重症の大怪我。なんとも大人気ないことである”、との翌日の朝刊の見出しが脳裏に浮かんだ。
相手がどう出るか、足がガタガタと震えていた。
ジロッと睨みを聞かせて、猿面男は山田から視線を逸らすと、
「ほれ、行くぞ」
と言って、黒毛をピシャリと引き綱で叩いた。
〜キャン！〜
と吼えて男の後を追う。
もう一匹も頭を下げて左右に揺すりながら、山田と直太郎から遠ざかって行く。
『ふ〜う、……よかった』
まだ足がガクガク震えている。
山田は、ウン！と気合を入れて、自ら両手で頬を張った。

3

・・それにしてもあんな犬に手綱もつけず、もしなにかあったらどうするつもりだ。最近ああいった無責任な飼い主が多い。他人から見たらどんな犬でも怖いものだ。況してや、猟犬を放し飼いにするなんて……。まったく無責任にも程がある・・

『なぁ～、直太郎？』

山田の顔を怪訝な表情で見上げ、クゥーンと甘えた声をあげた。

・・あ～あ、すっかり白けちゃったな。戻ろうか・・

しかし直太郎はお構いなし、ズンズント引き綱を引っ張る。

『こらこら、ゆっくり歩け。そんなに引っ張るなよ。わかった、わかった、行くよ』

要望に応えていつもの道程を辿ることにした。

田園地帯を一周する、ほぼ一時間の散歩コースだ。

道すがら、直太郎は色々なモノに興味を示しては、匂い（どちらかというと“臭い”か）を嗅ぎ、オシッコをかける。

そして時々草を食むのは、胸焼けの所為か、便通を良くするためか……。

山田と直太郎が有料道路の下を潜り、左に折れた。と、

『うッ！』

さっきの猿面男が、黒毛のアホ面犬と薄茶のマヌケ面犬の手綱を持って立っていた。

山田の心臓が早鐘を打つ。

・・な、なんだ。怒鳴ったのを根に持って、喧嘩をしに来たのか？・・

足がまたガタガタと震え出した。

しかし弱みを見せるわけにはいかない、山田は眉根を寄せて猿面男を睨みつける。

そして両足を踏ん張って気合を入れた。

『な、なんですか？　なにか、用ですか？』

言葉尻が少し震えた。

“昨日、散歩中に愛犬家同士が喧嘩、双方重症を負い入院……。なんとも大人気のない話だ……”、との翌朝の新聞見出しが脳裏に躍った。
「おう、さっきは悪かったな。俺はあの切通しの上に住んでいる○×ってモンだ。あんたも近くのモンだろう。勘弁してくれや」
と言って、猿面男が頭を下げた。
「このヤロー、静かにしねぇかッ！」
と、唸って敵意を見せる二匹の犬を引き綱で、ピシャリ、ピシャリと叩いた。
『あっ、えっ……、どうも、こっちこそ……』
意外な展開に山田はドギマギして応えた。
「じゃ～な。ほれ、行くぞ」
猿面の飼い主は、黒毛のアホ面犬と薄茶のマヌケ面犬の尻を交互に蹴飛ばしながら去って行った。
・・なんだ、悪いオヤジでもねぇな・・
『うッ！　眩しい』
真っ赤な太陽が顔を出し、東の空に朝焼けが広がった。
モヤモヤしていた山田の心もパーッと晴れた。
『さあ、直太郎、行くぞッ！』
〔ワン！〕

御仕舞

第十話　携帯電話を見ながら歩く輩

1

或る日の帰宅時、ＪＲ常磐線の柏駅……。
『あっ、いっ、とっととと……』
前を歩いている男が急に立ち止まる。
しかし、急ブレーキも間に合わず男の背中にトンとぶつかった。
山田一郎はむっととして、
『きっ、……』
気をつけろと声を発するよりも早く、男が、
「いてぇな」
振り返って山田を睨みつけた。
『きっ、……ごめんなさい』
男の迫力のある目付きに山田はたじろぎ、文句を言いかけたが、情けないことに口から出た言葉は、ごめんなさいのひと言……。
すごすごとその場を離れようとすると、
「ちょっと待てよ。……おい、待てよ。オヤジ！」
・・ああ、やばい。聞こえない振りして行っちゃおう・・
「おいこら、トボケてんじゃねぇよ」
追いかけて来た男が山田の肩に手を掛けた。
『うッ！』
と声を発して、山田は立ち止まった。
「うい、こらぁーッ！　舐めてンじゃねぇぞ」
威嚇する男と向き合った山田の足は、傍から見てもガクガクと震えているのがわかった。
それで更に付け上がった男がニヤリと笑って、
「ちょっと顔貸せ」
と凄んだ。

頼りなげな山田の態度に、金を巻き上げられるとでも思ったのだろう。
『は、はい。な、なんでしょうか？』
いつもなら土下座をしても争いごとから逃れようとするが、その日の山田は冷静だった。
「なんでしょう、じゃねぇよ」
『それでは、どんなご用件でございましょう？』
山田の足の震えが止まっていることに男は気付いていない。
男がいきなり山田の襟首を掴んだ。
『あっ、止めてください。お金ですね、お金ならあげますから、殴らないでください』
と言って財布を出しながら、殊更大きな声で山田は訴えるに言い放った。
いきなり財布を突きつけられた男が戸惑っている。
まさか、これだけの大衆の面前で財布を受け取るわけにはいかない。
「な、なに、言ってるンだ……」
と辺りを窺いながら、差し出された山田の財布に手を伸ばした。
「そ、そうか、慰謝料だ」
と言って、財布の中から一万円札を抜き出した。
その時、山田は男の肩越しに視線をやりながら、如何にも後ろの警察官に訴えるように、
『お巡りさ～ん、お金を取られました。こ、この男です』
と男の腕を掴んで叫んだ。
一斉に周りの乗客の目が二人に集中した。
「な、なにッ！」
慌てて財布と現金を投げ返すと、男は脱兎の如く駆け出した。

2

或る日の早朝、ＪＲ常磐線の日暮里駅……。

窓際サラリーマンの山田一郎が、混雑する車内から吐き出されるように飛び出した。
山田は混雑する電車内でのトラブルが嫌で、いつもは六時半に日暮里駅に到着する。
しかしこの日は一時間ほど遅くれて、七時五分に柏から乗り込んだ。
筑波ＥＸ（エクスプレス）の開通で以前より空いたとはいいながら、七時台はラッシュのピークの時間帯だ。
揉まれに揉まれて七時半に日暮里駅へ到着した。
久しぶりのことで身体がバラバラ、
・・ふ～う、参った、参った。この時間帯はこんなに混むのか。明日は遅刻しないようにしなくっちゃ……。毎日こんなんじゃ身が持たないよ・・
『おい、早く歩けよ』
向かいの三番線ホームに山手線が滑り込んで来るのが見えた。ということは、
・・間もなく四番線に京浜東北線が来るはずだ。急げば間に合う・・
会社の始業には十分間に合うのだが、いつもより一時間遅れで山田は気が焦っていた。
それで前を俯きながら歩く女性に、
『おい、早く歩けよ』
と強い口調で言っていた。
どうやら携帯電話を見ながら歩いているようだ。
最近、辺りを気にせず夢中になっている携帯オタクが老若男女を問わず多い。
こういった携帯オタクはぶつかりそうになっても、縦しんば（よしんば）ぶつかっても、詫びのひと言も言えない。
山田は詫びを言わない中国人をもじって、こういった輩に日中人（ニッチュウ）と名付けている。
＜そうではない中国の皆様、ごめんなさい＞
いきなり女が立ち止まった。

『うっ、とっととと……』
サッと身をかわしたが、鞄が軽く女の身体に触れた。
「な、なにをするのよ。私を突き落とす気ですか」
『あっ、いえ、ご、ごめんなさい』
山田は詫びを言ってその場を立ち去ろうとした。が、
「逃げるのですか、この痴漢男ッ！」
と、女が罵声を浴びせた。
『うっ……』
焦る気持ちからつい口を突いて出た言葉なのに、きつい反撃に山田は返す言葉を失う。
・・や、やばい・・
険のある目付き、どうやら虎の尾を踏んでしまったようだ。
『あっ、ごめんなさい』
と山田がその場を離れようとすると、
「待ちなさい、ってば。この人、私を突き落とそうとしました。誰か、駅員の方を呼んでください」
大声で女が叫んだ。
『ちょ、ちょっと待ってください。突き落とす、なんて……私は、なにも……』
ドギマギとする山田の額に汗が滲む。
しかしそんな二人の遣り取りにも、朝のラッシュ時の乗客は誰も興味を示さない。
チラッと一瞥をくれて通り過ぎて行く。
やがて土浦行きの上り常磐線が、二人が相対するホームに滑り込んで来た。
この時間帯の上り列車はガラガラだ。
それでも二人を邪魔だとばかりに、突き飛ばすようにして乗り込む乗客がいる。
「な、なにするンですか」
「やかましいーッ！　邪魔だ、そんなとこにボケッと突っ立ちや

がって、このヒステリーババアーッ！」
「なっ、なんですってぇーッ！」
・・チャンス・・
山田はスッとその場を離れ、他の乗客に紛れ込んでいた。
「あっ、痴漢が……」
・・おお、危ねぇ、危ねぇ・・
と囁きながら、山田は後ろも振り返らず階段を駆け上がった。
上から見下ろすと、女がキョロキョロしながら階段を上がって来る。
・・おっと、やばい、やばす。見つかったかな？・・
急いで三、四番線ホームの後方へと走る。
運良く京浜東北線の大崎行きが滑り込んで来た。
・・早く、早く・・
今にも女が階段を駆け下りて来るかと山田の気が焦る。
電車が停止してドアが開いたので、山田は飛び乗って奥へと進む。
・・早く、ドアを閉めろ。早く、走り出せ・・
山田は祈る。と、
・・やばい、女が階段を下りて来た。早く、早く、早く発車しろーッ！・・
心の中で叫んでいた。
女の目線が山田を探しているのがわかる。
・・あッ！　見つかる・・
思わず目を瞑っていた。
と、三番線には山手線が滑り込んで来た。
女の目が京浜東北線の車内から山手線へと移動した。
その瞬間、ドアがガガガッと音を立てて半分ほど閉まり、ドンと音を発してまた開く、
『あっ、うっ……』
女と目が合った。
・・やっ、やばい・・
山田が凍りついたとき、ドアがトンと閉じた。

・・俺はそんなに悪いことをしたのだろうか……。それにしても良かった。俺はこの時間帯の電車乗ることはまずない・・

それで山田は、もう一度大きく溜息をついた。

御仕舞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1223y/

バカヤロー！　小父さんたちは怒っているンだよ

2011年11月2日04時09分発行